

氏名	細田 雅也
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 8 4 3 9 号
学位授与年月日	平成 3 0 年 3 月 2 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	Understanding Causal Relations and Learning From Text in Japanese EFL Readers (日本人英語学習者による因果関係の理解とテキストからの学習)
主査	筑波大学 教授 博士（言語学） 卯城 祐司
副査	筑波大学 教授 磐崎 弘貞
副査	筑波大学 教授 久保田 章
副査	東京外国語大学大学院 総合国際学研究院 教授 Ph.D.(言語学) 根岸 雅史

論文の要旨

本論文は、第二言語 (L2) 読解研究において未解明の、英語学習者が説明文の因果関係を理解し（「因果理解」）、その内容を知識として学習すること（「テキストからの学習」）に至る認知メカニズムの解明を目的とし、特に、その重要性が指摘される因果理解を観点に検証している。具体的には、2つの研究（研究 1、2）により以下 3つの General Research Questions (RQs) に取り組んだ。

- General RQ1 英語学習者の因果理解には、どのような読解処理やテキスト記憶が関わっているか。
- General RQ2 英語学習者の因果理解は、テキストからの学習にどの程度貢献するか。
- General RQ3 英語学習者の読解処理やテキスト記憶は、説明文の因果構造をどの程度反映するか。

研究 1 (実験 1-3) では、英語学習者の因果理解とテキストからの学習の関係を検証した。実験 1 では、構築された因果理解の精緻さと、読解後のテキスト記憶との関係を明らかにすることを目指した。結果、因果理解には多くのテキスト情報を覚えていること以上に、関連情報を一貫してつなげて保持することが重要であることが示唆された。

続く実験 2 では、因果理解の精緻さと、最終的なテキストからの学習の成果との関係を検証した。実験の結果、テキストからの学習に対する因果理解の貢献度合いは、学習者の L2 読解熟達度に依存することが示された（「熟達度×因果理解の交互作用」）。具体的には、L2 読解熟達度の高い学習者においては、因果理解の精緻さがテキストからの学習成果を予測していたのに対し、熟達度の低い学習者において、そのような関係性はみられなかった。

実験 3 では、実験 2 において観察された熟達度×因果理解の交互作用の原因を特定することを目指した。結果、熟達度 × 因果理解の交互作用は、テキストに明示される因果関係を理解することと、因果的に一貫し

た状況モデルを構築することの両者の困難にすることが示された。

研究 2 (実験 4-6) では、学習者の説明文読解中における理解プロセスを検証した。実験 4 では、因果関係の状況モデルを構築するために必要な「因果推論」を学習者が説明文読解中に生成するには、テキストの内容親密度と学習者の L2 読解熟達度の両者が高いことが条件であることが示された。

実験 5 と実験 6 では、英語学習者の読解処理とテキスト記憶が、説明文の因果構造をどの程度反映しているかを解明することを目指した。まず、実験 5 では、読解処理の因果構造に対する敏感さは、因果関係の明示性に影響される可能性が示唆された。一方、学習者のテキスト記憶は、因果関係の明示性を問わず、説明文の因果構造を安定して反映していた。

そして、実験 6 では、実験 5 から示された読解処理の具体的内容を、思考発話法を用いて調べた。結果、学習者が因果構造に従って現在の情報と先行情報とをつなげて処理していたのは、学習者の L2 読解熟達度が高い、もしくは、因果関係が明示されている場合であることが示された。さらに、熟達度の高い学習者が離れた情報どうしを因果的につなげる処理 (distal bridging) のみ、読解後に構築された因果理解との相関が確認された。

以上の研究結果を総合し、General RQs への解答を考察した。まず、General RQ1 (英語学習者の因果理解には、どのような読解処理やテキスト記憶が関わっているか) について、英語学習者が因果理解を達するには、まず説明文の内容親密度が高いことが必要で、さらに、情報間の因果関係に読解中の注意を配分できる程度の L2 読解熟達度が求められることが解明された。そして、これらの 2 つが満たされた条件で起こる distal bridging のみ、因果理解と関係していた。

続いて General RQ2 (英語学習者の因果理解は、テキストからの学習にどの程度貢献するか) については、因果理解の精緻さがテキストからの学習を予測するのは、L2 読解熟達度が高い学習者に限られることが明らかとなった。熟達度が低い学習者は、テキストベースと状況モデルの両レベルのプロセスに困難を抱えており、その結果、テキストの因果関係を知識として学ぶことが難しくなっていた。

最後に General RQ3 (英語学習者の読解処理やテキスト記憶は、説明文の因果構造をどの程度反映するか) については、読解後のテキスト記憶は説明文の因果構造を安定して反映する一方、読解中の処理が因果構造を反映するのは、学習者とテキストの要因が許す限定的な条件に限られていた。

以上のことより、英語学習者の説明文読解における以下の関係は、読み手とテキストの要因による特定の条件が満たされた場合にのみ、限定的に現れることが実証された：(a) 読解処理と因果理解、(b) 因果理解とテキストからの学習、(c) 読解処理とテキストの因果構造。この結論を踏まえ、本論文では、学習者の因果理解やテキストからの学習を効果的にサポートし得る読解指導への示唆を提案している。

審査の要旨

1 批評

本論文は、日本人英語学習者を対象として、説明文の因果関係の理解とテキスト内容の学習に関わる認知メカニズムを検証したものである。従来の第二言語読解研究の多くは物語文を用いており、英語学習者による説明文読解を通じた知識獲得のメカニズムを検証した研究はほとんど見られなかった。本論文は、英語学習者の説明文読解中の処理からテキストからの学習に至る一連の認知メカニズムを、複数の実験を通し一貫して解明した点に意義がある。本論文の優れた点として以下の 3 点が挙げられる。

第一に、既存の第一、第二言語読解研究の認知的知見を包括的に議論し、先行研究の問題の所在と、それをどう克服するかについて明確に指摘している。例えば、テキストの明示情報を超えた「状況モデル」を適切に測定した第二言語読解研究が無かった点を指摘した上で、学んだ内容をテキスト外の状況に活用させる「問題

解決課題」を状況モデルの測定手法として用いている。これにより、「学んだ情報をどの程度活用できるか」という実践的な観点からテキストからの学習成果を規定し、教育的示唆を提案している。また、従来の研究では、再生課題によって学習者の因果関係に対する「記憶」を測った例はあっても、因果関係の「理解」を適切に測定する試みは非常に少なかったことを指摘して、テキスト内容を因果的な説明を求める「因果質問」のパフォーマンスによって因果理解を定義している。そして、観察された因果理解における困難が、学習者の認知能力一般ではなく、第二言語能力の制約に起因していることを、複数の実験から実証している。このような点から、本論文は先行研究の限界点を洗い出した上で、英語学習者の説明文読解の特徴を明確化し、既存の研究知見を前進させていると言える。

第二に、6つの実験のデザインはいずれも確立された読解理論に基づき、得られたデータも適切な統計処理・解釈を経て考察されている。例えば、データの測定手法について、実験5、6では説明文読解中の処理に対し、時間経過と内容の両者を測定対象とする **the three-pronged approach** を用いている。そして、この手法を支える理論的枠組みとして、テキスト情報間の因果的なネットワークを特定する **the causal network model** と呼ばれる読解理論を採用し、このモデルの想定と学習者が実際に行う読解とが一致するのは、理解の一貫性の基準 (**standards of coherence**) が文間の因果関係に置かれる限定的な条件においてであることを指摘している。このように、本論文は、先行研究の理論基盤に立脚しながら学習者の説明文読解メカニズムを解明し、既存の読解モデルの第二言語読解への発展を試みた意欲作と言える。

第三に、実験結果を総合し、英語学習者が因果関係の理解とテキストからの学習に至る条件が提示されており、本論文の目的がどのように達成されたかが明確に記述されている。例えば、読解中の処理が読解後の因果関係の理解に貢献するには、学習者の熟達度が高い上に、テキストの広範の情報を因果的につなげる必要があることを示している。さらに、因果関係の理解が最終的なテキストからの学習をもたらすには、相応の第二言語熟達度が必要になることを示している。このように、本論文は、読解中の処理、因果関係の理解、そしてテキストからの学習に至る一連の関係性を、学習者の熟達度とテキストの性質を観点として明確化している。

一方、本論文にもいくつかの限界点があることを指摘する必要がある。まず、実験で用いたテキストが非常に少ない。具体的には、多くの実験では、学習者向けに難易度を統制したテキスト1つしか用いていない。読解熟達度等の学習者要因と、言語的複雑さ等のテキスト要因が、説明文理解に及ぼす影響を解明するには、より多様なテキストを用いた検証を行う必要がある。さらに、本論文では、タスク等の教育的介入の読解に対する効果を検証していない。本論文の結果から示唆される読解指導がどの程度活用可能かは、実証研究による検証を待つ必要がある。例えば、本論文では、熟達度の低い学習者は複数の情報を統合して理解することに困難を抱えることが示されているが、読解に困難を抱える学習者をどう支援するか実証的に調べるのが望ましい。

こうした課題はあるものの、本論文は日本人英語学習者の読解やその認知メカニズムに関わる研究に新たな知見をもたらす、確かな理論と研究手法に基づき議論された優れた論文であると高く評価できる。

2 最終試験

平成30年1月26日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。